

自己を表現したくなる授業の創造

河辺 哲也*・山田 佳子*・糸長 雅弘

Planning of a Class that Motivates and Encourages Students to Express Themselves

KAWABE Tetsuya*, YAMADA Yoshiko*, ITONAGA Masahiro

(Received January 15, 2009)

キーワード：意欲、動機付け、表現したくなる、内的な言語活動、授業力

はじめに

「生徒自身が学ぼうと思ったことしか本当には力として身に付かない。」

この言葉は、昨年の研究会の席上で、ある先生が発言されたものである。私たちが取り組んだ3年間の研究は、この言葉に集約することができる。

これから、本校の3年間の研究を総括しながら、研究の成果とこれからの展望について述べてみたい。

1. 研究主題及び研究仮説に対する私たちの考え方について

昨年の3月に新学習指導要領が告示された。この指導要領総則の中には、「思考力、判断力、表現力その他の能力を育む」と明記されている¹⁾。具体的に育てたい力を明確に表したところが、旧学習指導要領の内容と大きく異なるところである。そして、思考力、判断力、表現力等を育むために、「表現する」「伝達する」「説明する」という表現活動をとおして、これらの力をつけていくことが求められている。しかし、ここでよく考えなければならないことがある。それは、「表現する」「伝達する」「説明する」という必然性を生徒に感じさせないまま、活動に取り組みさせてしまわないか、ということである。

例えば、表現したいものが心の中にない状態で、「話してごらん」「描いてごらん」などと指示されても、すぐには表現できないものである。つまり、自分の思いを表すためには、表現したいものを心の中に「ためていく」ことが大切なのである。逆に、授業の中で、その場を取り繕うような表現をしたとしたら、形だけを追った表現活動となり、生徒自身の力として身に付かないだろう。

私たちはおしゃべりな生徒を育てたいのではない。また、体裁のいい言葉を並べ、自分の本当の思いとのつながりに無自覚な生徒を育てたいのでもない。自分が本当に表現したいことをもち、その「思い」と、「表現」という行為を一致させようとする生徒を育てた

*山口大学教育学部附属山口中学校

いのである。

そのためには、生徒の中に「考えてみたい」、さらに「考えたことを周囲の人に表してみたい」という気持ちをもたせることが必要になる。つまり、その生徒の内面に表現したいものがあり、自己との対話をとおして「表現してみよう」という気持ちになるということである。それが、私たちの求める「意欲」なのである。私たちは、その「意欲」を、「自己を表現したくなる」という言葉でとらえた。

「表してみたい何か」を自分の中にもったとき、必然的にどのようにそれを外へ表すのか、生徒は考えたくなる。そのために、私たち教師は「表現したいもの」を生徒の内面にいかにしてもたせるか、ということ考えた。そして、その場を、学校生活の中核をなす「授業」に私たちは求めた。つまり、私たちの研究は、授業の中で、生徒が表現したくなるためにはどのような働きかけをすればよいのか、という「動機付けの研究」なのである。

以上のことを踏まえながら、「自己を表現したくなる授業の創造」という研究主題を掲げた。

2. 現在の教育情勢の中における研究主題の意味

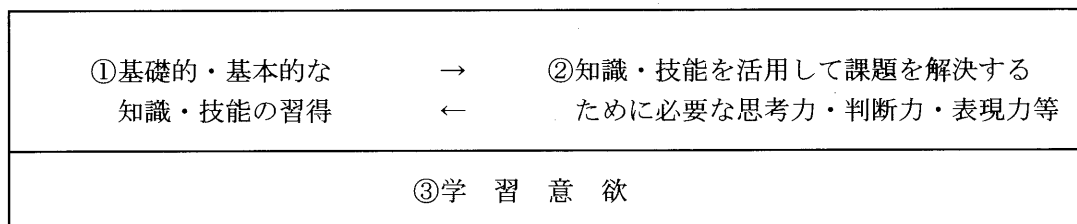
「自己を表現したくなる授業の創造」という研究主題は、現在の教育情勢の中で、どのような意味をもっているのだろうか。

平成19年6月に公布された学校教育法を受け、平成19年11月に出席された「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」では、学習意欲は、学力の重要な要素として次のように位置づけられている。²⁾

学力の重要な要素は、

- ①基礎的・基本的な知識・技能の習得
 - ②知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等
 - ③学習意欲
- であることを明確に示すものである。

私たちは、この位置づけを次のように解釈した。



この3つの学力の要素は、バラバラに存在するものではなく、①②③という学力の優先順位を表しているものでもない。③の学習意欲が①②を根底で支えながら、学力を形作っているのとらえたのである。このような観点にたちながら、特に次の2つの意欲に研究の視点を当てた。

一つめは、自分の感じ方や考えをとらえようとする意欲である。

二つめは、他者と関わりながら、とらえたことを表現していこうとする意欲である。

生徒たちの周囲は、さまざまな情報であふれている。しかし、その情報に振り回され、何が正しく、何が価値あることなのかを考えないまま、周囲の言動に合わせてしまう危険性も大きくなっている。そのような状況の中で、自分の目で見、耳で聞き、感じたり考えたりしたことを、他者をとおして確かめながら、自分で判断していく力が必要となる。それゆえ、この二つの意欲が、これからの社会を生き抜くうえで、生徒たちにとって重要な力だととらえた。

そこで、このような力を育てることをねらい、研究仮説を次のように設定した。

生徒が自分の感性や認識を表現したくなる場を、授業の中に意図的・継続的に仕組むことは、一人一人のよさを引き出し、他者と関わろうとする意欲を引き出すことになり、自分の学びに自身をもち、自ら考え、判断し、行動しようとする生徒を育てることになる。
(下線 筆者)

「表現したくなる場を、授業の中に意図的・継続的に仕組む」という研究仮説の一節は、研究の対象が、「授業」であることを明確に表している。「授業」とは、生徒自身の感じ方や考えを表すために、何度も吟味したり確かめたりしながら、少しずつ形にしていくプロセスの場である。この場の中に、「自己を表現したくなる」手だてを私たちが講じていくということなのだ。

このよう考えるとき、「自己を表現したくなる」ためには、「内的な言語活動」が大きな意味をもつと考えた。「内的な言語活動」とは、心の中で、自分の感じ方や考えを言葉などにして確かめ、表現したくなるための「根源的な活動」だととらえた。そして、私たちは、授業をとおして、生徒の知的好奇心を掻き立て、「内的な言語活動」をとおして自己との対話を深めることが、「自己を表現したくなる」契機になると考えたのである。

ところで、外部へ表現するとき、表現したいことがなかなか言葉にならなかつたり、絵や音、体の動きで表そうとしてもズレが生じてしまつたりする。自分が表したいことを表現できるまでには、「これでよいのか」と自分の中で吟味したり、確かめたりすることが求められる。そして、そのズレを埋めながら少しずつ形にしていくのである。

このように考えたとき、先程述べた、表現する前の「内的な言語活動」が大きな意味をもつ。そこで1年次は、すべての教科の授業において、「自己を表現したくなる」ための「内的な言語活動」をどのようにして掻き立てていくか、を考えた。

2年次は、さらに生徒が「自己を表現したくなる」には、どのような動機付けが必要か、模索した。具体的には、「教材選択・教材開発」「発問の工夫」「場づくり」の3つの視点から迫った。その理由として、生徒の感性は「本質的のもの、考えるだけの深さをもったものに敏感に反応する」と私たちはとらえているからだ。それゆえ、教示や発問は、生徒が考えなくなつたり、試してみたくなくなつたりするものでなくてはならない。また、どんなに優れた教材を準備しても、発問が工夫されなければ、その価値に生徒が会うことは難しい。つまり、「発問は教材の価値に生徒を会わせる糸口」になるのである。

場づくりという視点から言えば、発言したものを受け止める受信者のあり方が重要であった。「自分の感じ方や考えを超えた世界と出会う」という、受信することの価値を教師とともに、生徒自身が認識することが重要である。このような土台をつくることで、「自

分の感じ方や考えを素直に表しても、周囲が受け入れてくれる。」という安心感が生まれ、教室に支持的な雰囲気が育まれる。「発表したら目立ってしまう。何か言われそう。」という雰囲気があるところに、「自己を表現したくなる授業」は成立しないのである。

以上の3点を確かめた2年次の研究であった。

3. 生徒の変容と求めたい授業力

最終年次の今年次は、「自己を表現したくなる授業」の中で、生徒はどのように変容していくのか、次のように考えた。

- ①教材や教師の発問から、疑問や気づきが生まれ、知的好奇心が高まる。
- ②内的な言語活動をとおして、自己と対話し、感じ方や考えを言葉などの形にしてとらえる。
- ③他者に対して表現し、反応を確かめたいくなる。
- ④表現し、他者の反応から、自分の感じ方や考えをとらえ直す。
- ⑤他者の反応を踏まえて、表現できたことやできなかったことを認識する。

このように、授業の中で「教材」や「発問」を媒介にしながら、「内的な言語活動」をとおして自己との対話を深めさせることができるのである。そうすることで他者と関わり、より自分の感じ方や考えを確かなものになりたいという意欲へと高まっていく。

また、「自己を表現したくなる授業」をつくる時、私たちはどのような授業力が必要なのか、ということも問い直した。

私たちが求めた授業力は、次の4つである。

- ①教材を選択・開発する力
- ②生徒の多様な反応を引き出す力
- ③生徒の反応を解釈し、価値づけていく力
- ④生徒の発言をつなぎ、広げ、深めていく力

①は、育てたい力を踏まえ、教材を選択・開発する力である。生徒にどのような力を育てたいのか、という教師のねらいを明確にしたうえで、教材を選んだり開発したりすることである。「なぜこの教材か」ということ。そして、この教材のどこに生徒は表現したくなる要素があるのか、それを見抜く力が必要なのである。

②は、生徒の多様な反応を引き出す力である。具体的には、生徒たちが「思わず考えたくなる」「試してみたいくなる」発問は、どうあればよいのかということである。そして、その反応を教師がどれだけ拾うことができるか、つまり生徒の発言を誠実に聞こうとする教師の聞く姿勢が重要となる。

③は、生徒の反応を教師が解釈し、授業のねらいと絡めながら価値づけていく力である。生徒は、自分たちの考えや疑問に価値があることに気づいていない。多様な感じ方や考えが表されても、どの感じ方や考えに価値があるのか、教師がそれを明確にしなければ拡散した授業で終わってしまう。そこで、授業のねらいを踏まえながら、教師が生徒の発言を

聞き分け、価値づけていく力が必要となる。

④は、生徒の発言を価値付けながら、発言をつなぎ、広げ、深めていく力である。つまり、生徒の反応を授業の中で整理し、組み立て、思考を深めさせることである。

このような教師の授業力が、生徒一人一人の意欲を高め、「自己を表現したくなる」状況に誘っていくのである。

4. 3年間の研究の成果と今後の展望

「生徒が変容していくために私たちの研究はある」と考えている。そして生徒が変わるためには、教師がまず変わらなければならない。この研究で、教師は、そして、生徒は何を感じ、どう変わろうとしたのだろうか。この3年間の取り組みを振り返ったとき、次のような本校教員の言葉が強く印象に残っている。

表現できたことを研究の対象にするとしたら、授業が苦しかった。その理由は、生徒が外に表したものに目が向き、それを評価の対象にしてしまうからだ。でも、「表現したくなる」という研究主題を踏まえて授業を考えたとき、発表する生徒はもちろん、悩んでいる生徒や表したいことがあるけど、うまく表せない生徒の表情が見えるようになってきた。
(下線 筆者)

表現において大切なことは、その生徒の内面に「表現したいこと」があり、それを表そうとする意欲である。その「表そう」という意欲を、私たちがとらえることが重要であった。つまり、「悩んでいる生徒」の姿を、自分の思いと表現とのズレを自覚し、表現することから目を背けない生徒の姿として解釈することができるのか、ということだ。そして、解釈したことを授業の中に組み込んでいく授業力を私たちは身につけたかったのだ。

私たちが、「自己を表現したくなる授業」という研究主題にこだわり、四つの授業力を磨きたいという思いは、このような生徒の姿も評価したいと考えたからである。「生徒の表情が見えるようになってきた」というように、生徒のつぶやきや表情を見逃さない姿勢を私たちが得たことは、今回の研究の大きな成果であった。

また、次のような生徒の言葉にも注目したい。

これは昨年度の卒業式のあと、卒業生が数学科担当の教師をたずね、渡した手紙の一節である。

私は本当に数学が苦手です。でも、決して嫌いではありません。先生の授業がおもしろかったからです。今でも、数学はできないけれど、好きです。最後の授業で発表できて嬉しかったです。私は数学に関する説明は全くできなかったのですが、他の人のようにピシッと説明してみたいと思いました。
(下線 筆者)

「生徒にこんな力を育てたい」という願いをもって、教材を選んだり、あるいは作ったりする教師の思いは、この生徒の「授業がおもしろかった」という言葉として返ってきた。ここで重要なことは、この生徒が「数学が苦手」と自覚していることである。「数学はできないけれど好きです」とは、どういうことだろうか。

それは、課題を解決するところまではいかないことが多かったけれども、「考えることが楽しかった」ということである。「考えたくなる教材や発問」を準備する教師の日々の積み重ねが、「他の人のようにビシッと説明してみたい」というところまで、生徒の意欲を高めることができたということだと考えている。この生徒の姿は、まさしく、私たちが求める「自己を表現したくなる」姿であったととらえている。

おわりに

このような3年間の研究の成果とともに、これからも継続していくべき考え方や今後の展望が明らかになったことも大きい。特に、3つのことをあげてみたい。

一つめは、「考えてみたい」「試してみたい」そして、「表してみたい」という意欲に支えられたとき、生徒にとって学ぶ必然性が生まれるということである。

二つめは、「生徒の実態」と「教材研究」の関わりを考えた授業づくりである。そのためには、生徒の実態を踏まえながら「育てたい力」を明確にしたうえで、「教材選択・開発」「発問の計画と工夫」「板書の計画と工夫」をおこなっていく必要性を強く感じている。

三つめは、「自分の感じ方や考え」を「つくり」「くずし」「再構築する」場として、授業は大きな意味をもっているということだ。つまり、生徒にとって、授業は「自分を変容させる場」ではないかと考えられる。すると、「他者」という存在がますます重要になってくる。

新学習指導要領の告示に従い、教育情勢も刻々と変わってこよう。しかし、いくら周囲が変わろうとも、私たち教師が求めたいものがある。それは、「授業の中で生徒の感じ方や考えに出会いたい」「わずかでもいい。生徒の変容を生み出したい」という授業への思いである。生徒が変容する姿に出会う喜びが、何ものにも勝る私たちの力になると思えてならない。

引用文献

- 1) 「中学校学習指導要領」（平成20年3月文部科学省）
- 2) 「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」（平成19年11月文部科学省）

【研究同人（山口大学教育学部附属山口中学校）】

濱崎美幸・荒瀬淳子・網本徳文・美作健悟・濱野愛華・吉村仁・中村好弘・石井岳文
大田誠・横沼潤一・徳光和也・藤屋慎一郎・田村恵美・野崎誠・津守真治・山口英司
津村幸江・岡村賢吾・末富真人・中村匡宏・高菅靖友・内田陽子・鹿島由湖